



巻頭言

国際化の現状

●
林 高史 Takashi HAYASHI

2026 年度日本化学会 代表理事・副会長, 大阪大学大学院工学研究科 教授



サイエンスの世界でも国際化の重要性が指摘されて久しい。国も大学等の研究機関も様々な取り組みを模索し、いろいろな予算を投じてきた。しかしながら、2020年から始まったコロナ禍で、一気に人的な交流が閉ざされてしまい、予定していた海外滞在計画を断念した方々も多かったことと推察する。その後、コロナ禍がほぼ終息し、元の状態に戻って数年経つが、我々の国際化の現状はどうであろうか。気になっていたことが若干顕在化しているように思われるので、ここにその例を少し示したい。

先日、米国のある教授を訪問した際に、昨今は日本人の研究者の米国大学の訪問と教室セミナーでの講演がめっきり減少していることを危惧しておられた。さらに、最近、米国の大学において、ポスドクとして活躍している日本人の若手研究者の姿も昔ほど見かけなくなったとも指摘された。この米国教授によるショッキングな見解の少し前になるが、筆者が欧州の某 JSPS センター主催の現地日本人研究者の集まりに出席した際に、現地で活躍している日本人大学教員の方々から、以前に比べて若い日本人研究者が滞在しなくなったのはどうしてなのか、と問い詰められた。欧米におけるこれらの事象について、筆者は具体的に示す数値データを持ち合わせているわけではないが、もしこれが事実であれば、多少なりとも深刻な問題ではないだろうか。

もう1つの例は昨春ある大きな国際会議に出席したときのことである。8年前に同じ場所で開催された同じ国際会議では、大勢の日本人研究者が参加していたことが印象に残っていたが、今回は会場内ですれ違う日本人らしき参加者が顕著に少なく感じられた。もちろん極端な円安と欧米の物価高が我々の海外渡航に大きな影響を及ぼしているのは事実ではあるが、その点は各方面からの財政的な支援を期待するとしても、我々研究者も、改めて海外の研究者との真の交流や海外での活動を促進するマインドを抱くべきではないだろうか。具体的には、大学も企業も若い研究者を中・長期間海外に派遣する制度の拡充や、それを推進する環境づくりにさらに努めることを提言したい。大学においては、教員ポストの削減等々で、若い研究者が多忙を極め、海外に長期間滞在して研究活動をするような状況ではないとも聞いている。学位を取得した後に海外で武者修行をした研究者を、企業も大学も彼等の経験を有益であると評価をして採用する人事制度や、若い研究者を周囲が心理的・物質的にサポートして、彼等が気後れすることなく海外に赴くことができる雰囲気や育めないだろうか。もし長期滞在を望めないとしても、例えばテニュアトラック教員には、10日間程度の短期間でもよいので、複数回の海外での講演旅行（レクチャーシップ）を昇進の条件にしていかがだろうか。国際会議に出席すればそれで十分という意見も時々あるが、海外の現場に実際に身を置き、研究室の空気を感じ、実験装置に直に触れながら、そこで仕事している人たちとディスカッションすることは、何事にも代えがたい経験だと思う。

少し悲観的なことを記してしまったが、逆に喜ばしいのは、筆者の若い頃に比べて、今の若い人たちの英語の語学能力が格段に向上していることである。冒頭で紹介した米国の教授が、ファーストネームで呼び合える真の友情を築くことは非常に大事であることも指摘していたが、語学力の向上の次は、実質的な国際交流をどのように展開するかが、ポイントになると考えられる。昨今、国際共同研究が重視されているが、有意義な国際共同研究の推進には、まずは人と人の信頼と交流が鍵であると痛感している。若いうちから海外経験を積み、真の友人を多く作ることが、サイエンスの世界でも必要である。ぜひとも若い世代（学生や企業の研究者も含めて）が躊躇なく海外に向かうマインド育成（背中を押す制度を作る実質的方策や環境作り）を今一度、皆で考える時期ではないだろうか。